
家族再生屋

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族再生屋

【Nコード】

N8410Y

【作者名】

脳好き人間

【あらすじ】

崩れてしまった家族。俺は妹のために出来る限りのことをしたつもりだったが、それでも駄目だった。しかし、あの変人がやって来て……

三割事実、七割脚色です。まあ、こんな家庭、いまどき普通ですよ
ね。

プロローグ

俺が中学生になったころ、両親が離婚した。

親達は理由を必死に隠そうとしていたが、子供は以外と鋭いものだ。俺にはそんなことが分かっていて、それまでは空気を読んで知らないフリをしていたが。

単刀直入に言うと、母親の不倫がばれたのだ。

まあ、本当は、ばれたのではなく、父親が我慢出来なくなった、のだ。

俺が母親の不審な行動に気付いたのは小学生四年生の頃だった。ただ、どうだろうか？

確か俺は学校をサボり、家の近くで隠れていたのだ。テレビドラマで見たような不倫が我が家で起こっていないかを確かめる為に。まあ、まさか本当に現場を目撃するとは思っていなかったのだが。

当時の俺は戸惑い、悩んだ。見たことを家族に話すか、心の中に留めておくか。

最終的に、留めておくとした。あの頃の俺は、所謂小学生であり、時間が解決してくれるなどと甘い考えをしていたのだ。

しかしまあ、あの後家に電話が入ったらしく、近所で落ち込んでいた俺を母親が探してきたのだが、あのときの母親の言葉は傑作だったな。

「学校を勝手に休むなんて、どうしてそんなことしたの？何か嫌なことでもあったの？」

「実は、アンタが不倫してるのを目撃しちゃって」

とは流石に答えなかった。つか、言ったら更に傑作だっただろうが、当時の俺は現状維持を選んだのだ。

よくよく考えれば、俺が小二くらいの頃から父親の表情が暗かったし、あのころからアレは始まっていたのかもしれない。父親も現状維持を選んだんだな。流石は俺の親だ。

離婚が決まった当初、父親が俺、母親が妹を引き取ることになりそうだったが、俺は断固拒否した。

妹をあんなクズに育てさせる訳にはいかない。その日の晩、妹が寝付いたのを確認すると、母親に俺は話した。俺が見たことを。

母親はそれを聞くと、泣きわめきだし、最終的には俺の要求を飲んだ。自分で原因を作っておいて自分で泣き出すとは、まさしく傑作、傑作だった。

俺が出した要求は、妹は絶対に父親が引き取ることだったのだが、結局俺も父親が引き取ることになった。まあ、母親もこんな子供を引き取りたくはなかったのだろう。

当時小学五年生だった妹はとても辛そうで、俺もその姿を見ると辛かった。

そして誓ったのだ。あんなクズのせいで妹を不幸にすることなど決してしないと。

高2の冬、変人来訪（前書き）

偽名、登場人物紹介

名偽^{なにせ}……兄。

仮名^{かな}……妹。

仮善^{かりよし}……父。

名前無しで物語を進めるのは無理でした。まあ、仕方が無いから偽名です。

ザ、偽名、を目標に名付けました。

高2の冬、変人来訪

溜め息を吐きながら、家に帰る。今日は部活の試合があり、疲れたのだ。一刻も早く寝たい。

「ただいま」

誰も家にはいないが、形式的に言っておく。はあ、昔は家に帰ると妹が「おかえり」と言ってくれていたのに。

冬の寒さに耐えながらシャワーを浴び、着替え終わると、睡魔が襲ってきた。瞼を閉じ、考え事をする。

最近妹が帰ってくるのが遅いが、危ないことしてないだろうな。心配だ。明日はクリスマスイブらしいが、まさか家に帰って来ない、とかはないよな？

部活も大変だ。立派な兄としてスポーツを一応やっておこう、くらの気持ちで入部したのに、まさかキャプテンにされるとは。

親父、仕事は大丈夫なのか？不景氣らしいし、最近は帰ってくるのがいつも遅い。いや、どーせ仕事の帰りに麻雀でもしているんだろうけど。

ああ、眠い。でも、寝る前に晩飯を作らないと……

「おい、起きろ。起きろ」

親父、か。つーか俺、寝てたのか？しまった、晩飯、晩飯を作らないと。立派な兄として、妹を空腹に苦しめさせる訳にはいかない。

「親父、仮名^{かな}はもう帰ってきた？」

「……………いや、まだだ」

よし、セーフだ。急いで晩飯を作ろう。っと、あれ？親父の横に、変な奴がいるぞ。

「おお、ようやく気付いたか。ふむふむ、なるほど、情報通りの人間だ」

変な奴に話し掛けられた。いや、独り言、なのか？

「……………この人は、家庭教師だ。俺が雇った。仮名の受験の勉強を教えてもらおう」

俺が戸惑っていると、親父が説明してくれた。だが、聞き捨てならないな。こんな怪しい奴に、仮名の家庭教師を任せられるはずがない。

「……………なるほど」

とにかく、後でこいつとはたっぷり話さないといけないな。それに、親父とも。

「そういうこと。よろしく。俺のことは気軽に「おじいちゃん」でも呼んでくれ」

変人が話し掛けてきた。初対面でため口とは失礼だな。やはりこんな奴に仮名の……って、お、おじいちゃん、だと？

き、聞き間違いだよな？ 改めて変人の方を見る。どう見ても、そんな年には見えない。というか、むしろ俺と同じ年くらいに見える。

助けを求めて親父の方を見ると、ただただ苦笑いを浮かべているだけだった。

「あの、おじいちゃん、ですか？」

「その通り。まあ、それが嫌なら「師匠」とか、「先生」とかでもいいけど。あつはつは」

変人は、無表情で淡々と言ってくる。あつはつは、など、ふざけているようにしか聞こえない。というか、こいつ、絶対にふざけているだろ。

「……………晩御飯を作らないといけないので、失礼します」

逃げた。というか、もはや逃げるしかなかった。立ち去るとき、親父の方を見たが、相変わらず苦笑いを浮かべていた。

料理を作りながら、俺は必死に考えた。

あの変人は誰だ？あの様子だと、正式な家庭教師ではないはずだ。ならば、親父の知り合いか？いや、あの親父にあんな変人の知り合いが出来るほどの元気はないはずだ。そもそも、我が家に誰かを雇う程の金など無い。

なんだ。夢か。ああ、これが明晰夢ってやつなんだな。つか、あんな変人が我が家にやってくるなんてありえないだろ。いやあ、傑作、傑作だ。

俺はフライパンを見つめると、ゆっくりと手の平を押し付けた。一回やってみたかったのだが、火傷はしたくないから我慢していた。でも、夢なら安心だぜ。

「ぎやははははは、ごめん。いや、まさか夢だとか、意味不明な勘違いしだすとは予測してなかった。マジでごめん。俺も、決してからかってたつもりはないんだ。緊張してたからあんな変なことを言ってただけ」

「いや、もういいです」

前とは違い、表情も笑っている変人いわく、さっきの態度は緊張してたからだそうだ。でも、ぎやはははは、も笑い方としてはおかしいと思うが。

「いやあ、想定以上の面白さです。やっぱりこの家は、良いデータになりそうだ。仮善^{かりよし}さんも大変ですね？」

「……ああ」

苦笑いから笑いが消えた顔で、親父が答える。ふむ、親父と変人は知り合いパターンか。

とにかく、情報を整理しよう。立派な兄として、これくらいで動揺してはいけない。

片手を氷水の入った洗面器に浸けながら、冷静さを取り戻そうとする。が、変人の次の言葉で俺は本当の意味で動揺させられてしまう。

「まあ、理解しました。仮善さんは娘にどう接していいかわからず、仕事が終わると麻雀に逃げている。そして名偽^{なにせ}さんは妹の事を大切に思っているが、父と同じく接し方がわからない。そして中心人物である仮名さんは、高校受験を前に若干ぐれかかっている。で正しいですね？」

「は？」

「……………そうだ」

何故、初対面のこいつが親父はともかく、俺のことを知っているんだ。親父から聞いたのか？

いや、家にほとんどのいない親父が、俺のことを知るはずがない。それにさっき、僅かに親父が驚いた顔をしていた。表情に乏しい親父が驚いた顔をしていたのだから、余程驚いたのだろう。あの変人、一体何者なんだ？

「何故それを…」

「ストップ。今から決めぜりふを言うので待ってください。いきますよ」

「決めぜりふ？」

「……………」

「名偽さん。あなたは家族が崩れたとき、心にダメージを負った。そこでスイッチオフ、死にたい。だが、死ぬのは怖い。そうだ、妹の為に生きよう。ならば、辛いことがあっても耐えられる。自分の為に生きるわけじゃないのだから、自分が傷ついても関係ないや。流石脳、頑張ってダメージを隠して本体を守ってくれたんですね」

「おい、止める。何を言っているんだ。俺は立派な兄だぞ。俺は純粹に妹を助けたいと思って……………」

「本当に妹を助けたいなら、こんな状態にはなつてませんよね。『立派な兄』を演じているうちに自分の環境が良くなった。キャプテンに選ばれる程に部員から慕われてますしね。そこで、脳は考えたもう、妹の為に生きる必要は無い。自分の為に生きられる」

「いや、俺は今でも妹の為に……」

「表面上はそうです。だが、中身はどうでしょう。実際、仮名さんが大変な時にあなたは部活を楽しんでいますし」

「そ、それは……」

「安心してください。ほとんどの人間は自分の本音を自分にすら隠しています。別に変なことではありません」

「……………」

「でも、名偽さん程完璧に自分を騙し、『立派な兄』を演じている人は初めて見ました。これはすごいことです。『偽物』の『人間』ですね。略すと、……」

「……………」

「『偽者人間』です。いよつ、カッコイイねえ。あつはつはつは」

「……………」

「……………余裕で合格点です。報酬に見合う仕事をしないといけませんし、仮名さんを志望校に合格させるついでに、崩れた家族を『再生』してみせましょう」

高2の冬、変人来訪（後書き）

脚色しまくれば、結構変わるものですね。

うーむ。ダンゴムシの生態、とかも脚色しまくれば感動のストーリーになるかも。

変人との決闘

「いやあ、実は僕、『どうしようもなくなった』物を『どうにかする』のが趣味なんですよね」

「趣味、だと？」

この変人は何を言っているんだ。ついでに、趣味で、家族を再生、だ。

家族を何だと思っているんだ。ついでに、でどうにかなるなら、とつくに俺がなんとかしている。ふざけるな。

「まあ、この家はまだ救いようがあります。家族が本当にばらばらになったわけじゃありませんし」

救いようがある、か。

「ふざけるな！お前、家族は物じゃないんだぞ！再生とか、何言ってるんだ！救いようがある？お前は俺達の何を知ってるって言うんだ！」

立ち上がり、変人を殴ろうとする。が、足がもつれてしまい、氷水を入れた洗面器に足を突っ込んでしまった。

「……………くそがつ！」

どうしようもない気持ちになった俺は洗面器を変人に投げ付けた。変人はそれを避けようともせず、洗面器は変人の顔面に直撃した。

しまった、と思う。本当は顔面に当てる気などなく、肩辺りを狙っていたのだ。

「ぐわあー、痛い！痛すぎるー」

俺の心配は杞憂だった。変人は、無表情で痛みを訴えてくる。その姿を見ると、更に怒りが込み上げてきた。

今度こそ殴ってやる。そう思い、拳を振りかぶった。

「やめろっ！」

頬に痛みを感じる。どうやら、親父に殴られたみたいだ。

「……落ち着け、名偽。らしくないぞ」

「……すみませんでした」

親父に諭され、我に返る。というより、初めて聞く親父の怒鳴り声に驚いただけかもしれないが。

しかし、俺が冷静さを失うなんて、久しぶりだ。やっぱ、さつきの変人の『名ぜりふ』が効いてるのかもしれないな。

いけないな、これじゃあ立派な兄失格だ。

「ちょっと仮善さん。邪魔しないでくださいよ。せつかくここまで作戦通りだったのに」

「……………すまん」

「いえ、謝らなくて結構です。それより、これ以上邪魔されたくありません。席を外していてください」

「……………わかった」

親父は変人を庇っただけだというのに、何故か怒っているようだ。無表情で親父を追いつ出した。

その様子に少し腹が立ったが、我慢する。あんな失態を繰り返す必要は無い。

「せっかく名偽の本音を聞くチャンスだったのに、失敗してしまった」

親父が去り、二人きりになると、変人が喋りだした。

「名偽、どうしてくれるんだ？俺、僕は予想外の出来事に弱いんだ。緊張で視界が霞んできた」

「……………いや、そう言われても」

相変わらずの無表情で話し掛けてくる。しかし、緊張、か。そういえば、無表情なのは緊張のせいだと言ってたな。まさか、マジなのか？

「や、やばい。くらくらする」

そう言い、変人は俯せになって寝転んでしまった。

俺はもう、戸惑うくらいしかやる事がなくなってしまう。

「よし、思い付いた。作戦二だ」

しばらくすると、俯せのまま喋りだした。

「正直に言おう。はつきりと。オーケー？」

「……はい、どうぞ」

「この家の人間は、勇気がなさすぎる。多分、妹さんに「受験勉強しろやゴルァ！」とか言ったことないだろ？」

「……はい」

そんなこと言えるわけがない。仮名の心が傷付いたら大変じゃないか。

「要するに問題点はそこだけだ。怒れ。怒るのも愛情の内だ」

「……………」

「俺、俺が今まで見てきた人間で、怒られずに育ってまとな人間に

なつた人はいない」

「……………」

「二人の例を出そう。まず、俺の親父。怒られずに育ち、この前借金一千万してた」

「……………一千万」

「例えば俺、怒られずに育ち、冬休みになつて早速家に帰らなくなつた」

「……………」

「誰かを怒るってことはつまり、その人の心配をしている、大切に思つてゐることだ。妹さんが家に帰らない理由の一つに、家族にどこでもいい存在だと思われてる、みたいな勘違いがある可能性が高い」

「……………そんな」

「一つお願いがある。俺、儂を信じてくれないか？一応お前の親父さんにも信頼されてるんだ、俺は悪い奴なんかじゃないぜ？」

「……………」

確かに、親父はあれでも人を見る目だけはある、と思う。結婚相手に失敗したことを除くと、だが。

親父の知り合いは優しい人ばかりだし、家が大変なときは親父の

知り合いが親身になって助けてくれた。

「それに、だな。俺は、自分の家以外の家庭の事情をことごとく解決してきた実績がある。ことごとく、と言っても二回だけだが」

「……………」

「以上、とりあえず、怪しい者じゃないと信じてくれ」

「……………わかりました。じゃあ、取り敢えず顔を上げてください」

「それは出来ない」

「は？」

「俺、俺は今、緊張のしすぎで体が震えているからな。そんな状態なのがばれたら信用無くすだろ」

「……………」

いや、それを自分で言ったから隠していたのが無意味になっちゃってるよ。

でも、まあ、信用出来る、のか。親父が認めた奴だし、な。

気がつくと、数分前までの変人に対する敵意が消えていた。

まあ、しばらく様子を見よう。もしもこいつが妹に害になりそうなら、その時対処すればいい。

兄と父と変人

「……仮名、帰って来ないな」

時計の針は、午後九時頃を指していた。遅い、遅すぎる。まさか、不審者に襲われたりしたんじゃないだろうな？

さつきから、変人と親父が麻雀をしていて、俺は部屋の隅で読書をしていた。

うわ、すごく居づらい。仮名、早く、早く帰って来てくれ。

「名偽さん、読書が趣味なんですか？」

「あ、はい。本は、色んな知識を楽しみながら知ることが出来るから」

「ほう、なら、今度面白い本を貸しましょうか？ 儂も、読書が趣味なんですよ。読書は脳を活性化してくれますからね」

「ありがとうございます。正直、本を買う金がなくて困ってるんですよ」

「ざっつおーるらいと。あっはっはっは」

「あの？」

「なんです？」

「なんでさっきから敬語を使うんです？ちょっと前まではため口でしたよね」

「それには、深い事情があつて……」

「深い、事情？」

「実は、自分より年上の人間がいると、敬語以外の話し方をするのに異常な精神力を使うんです。おかしいですね。別に仮善さんのことを敬つてゐるわけでもないのに……」

「……おい」

その時、小さく、だが大きな意思を持つて、親父が口を開いた。

「敬つてない、だと。それじゃあ、深い事情じゃなくて、不快な事情だ！」

「……………！？」

「……………あつはつは。ナイスツツコミです」

ツツコミ、だと？親父が、ツツコミ、だと？

親父がツツコミなんてする人だったなんて。それに、意味不明且つ面白くない。

俺は今日、家族の新たな一面、それも出来れば知りたくなかった一面を知ってしまった。

「お、親父、今のつて」

「……………すまん」

「ちょっとちよつと、名偽、仮善さんはさっきまでの儂と名偽の陰悪な雰囲気とを和ませようと思って、儂の案に乗ってくれたんだ。そこは素直に笑つとけ」

目を逸らし、俯く親父を変人がフォローする。変人は、既に敬語を止めていた。

つまり、最初の会話の時点からこの無駄なやり取りの為だけに、親父に恥をかかせるためだけに、敬語を使っていたというのか？

そういえば、親父のツツコミの後、変人は表情も笑っていた。これまでの経験からして、あの変人の表情があるときは即ち、あいつの作戦通りに事が運んでいるということだろう。

変人、おそるべし。

「あのさ、親父。俺とこの人、さっき親父がいない間に一応和解したんだ」

取り敢えず説明しておく。これ以上あの変人に場を掻き回されたくない。

「……………そう、か。それは良かった」

俯いたまま親父が答える。くそ、変人め、よくも親父に精神的ダメージを与えたな。

時計は九時十分を指す。

すると、変人は台所をうろろし始めた。

「どうしたんです?」

「や、やばい。輪ゴム、輪ゴムはないか?」

輪ゴム、ね。意味がわからないが、取り敢えず渡しておく。弁当屋で弁当を買った時に付いていたやつだ。

「助かった。感謝する」

変人はその輪ゴムを手首に通し、パチンツ、と手を叩いた。

「どうしたんです?」

「暗示だよ。俺は気が弱いから、常に自己暗示をかけて平静を装ってるんだが、さっき暗示の材料の輪ゴムが切れてな。あっはっは」

「自己暗示、ですか」

もしかすると、緊張すると無表情になるのは、暗示のせい、なのか?

「いやあ、最近脳のことを研究始めてね、色々面白い試みしてるんだ」

「はあ、研究、ですか。もしかして、そういったお仕事をされてる

んですか？」

「いや、僕は普通の工業系の学校の学生だ。将来はエンジニアだな」

「は、学生？えつ、今何歳なんですか？」

「年は、名偽と同じだ。つーか冬休み云々の話したよな。それで学生だってわからなかったのかい？」

「いや、え、まさか。まさか、同じ年なのにずっと俺に敬語使わせてたんで、使わせたのか？」

「いやあ、痛快だったよ。年下以外に敬語で話されるのが、あんなに楽しいとはね。ぎゃっはっはっは」

「そんな、馬鹿な。く、屈辱だ」

俺はこんな変人に、年上でもないのに敬語を使っていたなんて。

「おっと、そろそろだ。気を引き締めたまえ」

その言葉と同時に、玄関の音がする。仮名が帰ってきたんだ。

仮名は部屋に入ってくると、一瞬の沈黙の後、俺に尋ねた。

「名偽、この人誰？」

「え、えつと、お前の家庭教師だ。名前は……」

名前は、ええと、あ、名前はまだ聞いてなかった。

「ちょっとお父さん。どうゆうこと？私聞いてないんだけど？」

「……………」

仮名の怒りがこもった質問に、親父は黙り込んでしまった。ふと、変人の、「勇気がなさすぎる」という言葉を思い出した。こもったもだ。

よし、俺が勇気を出そう。立派な兄として、妹を怒るぞ。

「仮名、お前、受験前だろ。受験生はちゃんと勉強しろよ。お前が勉強してないから親父が心配して家庭教師を雇ったんだ」

俺の精一杯の説教を聞くと、一瞬驚いたような顔をしたが、すぐにこちらを睨みつけてきた。

「名偽には関係ないでしょ。私はお父さんに聞いたの。もういい、私、お風呂に入ってくるから」

「……………思ってたより怖い娘さんですね」

「……………すまん」

「……………」

「名偽、どうしたんだい？」

「いや、妹に怒ったの、初めてだったから」

手足の震えが止まらなくなっていた。

「でも、ナイス説教だった。俺、僕には大きな一歩を進んだように見えたよ。あっはっはっは」

「でも、全然効果がなかったような気がする」

というか、むしろ睨まれてた。まさか妹に睨まれる時がくるとは、辛いな。

「いやいや、効果があつたよ。あの妹さんの驚いた顔、あれには確かに、いや、言うのは止めておこつ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8410y/>

家族再生屋

2011年11月27日09時58分発行